

「守る手」

学校と地域が手を取り合い 豊かな学びの場を作る
 —— 特産のマコモダケを通して 生まれる地域への愛着 ——

待ちに待った収穫

「行くぞー」「イエーイ！」
 送迎のワゴン車から勢いよく降りた子どもたち。畑までスキップしながら楽しそうに向かう。今日は地元の特産「マコモダケ」の収穫の日。毎年豊野小学校の3年生が地域の人たちと一緒に、植え付けから収穫・調理までを体験している。

：マコモダケ？

マコモダケは中国料理では高級食材として使われ、東アジア

原産のイネ科多年草マコモの肥大化した茎を食用にしたもの。歯触りの良さと自然な甘さで天ぷらや炒め物などにぴったり。宇城市合併以前、豊野町が同名の長野県豊野町と交流する中でマコモダケが伝わり、栽培が始まった。今では町の特産品だ。

見守る地域

「井澤さん！木村さん！こんにちはー！子どもたちが元気よくあいさつをしているのは、



晴れ渡る秋空、木々や小川など豊かな自然に囲まれた環境で、伸び伸びと収穫を楽しんだ子どもたち。後ろに見えるのは田んぼに植えられたマコモダケ。成長すると高さ2メートルにもなり、子どもたちの姿がすっかり隠れてしまうほど。

マコモダケ栽培の指導をする井澤立介さん(57)と木村和弘さん(62)。これまでの交流を通じすっかり仲良しに。

井澤さんは「子どもたちにマコモダケのことを学んでもらいたいのはもちろんだけど、笑顔を見るだけでこちらもうれしくなるので、毎年続けています。思い出を作ってもらい、地元を好きになってくれたらうれしいです」と期待を込めて語る。

地域と子どもをつなぐ存在

井澤さんや木村さんといった地域住民と学校を結び付けているのは、宇城市地域学校協働活動推進員の田上美智子さん(43)、甲斐高子さん(39)、桑原千春さん(44)の3人。学校からの依頼を受け、体験学習のほかにも読み聞かせや丸付けボランティアなどへの協力を地域住民に呼び掛ける。制度開始からす



子どもたちのリラックスした表情と楽しそうな声。交流を重ねることで地域の人への信頼感が高まっていることが伝わってくる。文部科学白書2018でも「幅広い経験を持ち、優れた知識や技術などを持っている社会人や地域住民が、様々な形で学校教育に参加することも、学校教育の多様化・活性化を図るために極めて重要」とその重要性が記載されている。



でに10年以上。今では、なくてはならない存在になった。
子どもたちの学びへ

この日みんな収穫したマコモダケは、3日後、市食生活改善推進員の協力で調理。肉巻きやてんぷら、かき揚げの3品を作った。前田彪音さんは「自分たちで育てたマコモダケはとってもおいしい。地域の人と一緒に調理するのもとても楽しいです」と満足げ。

市食生活改善推進員の坂井祐子さん(71)は「準備など、始めるまでは少し大変なんです。でもやってみると楽しいから続けられています」と話す。

豊野小学校の小原ひとみ教頭は「体験で知識がより身に付き、学びが深まります。地域の方々の協力で子どもたちの学びの機会が豊かになり、とてもありがたいです」と感謝する。